

日本手話・日本語バイリンガル児童の日本語の習得

小学部第3学年と中学部第1学年における日本語作文の比較をとおして

阿部敬信

(別府大学短期大学部)

KEY WORDS: バイリンガルろう教育・第二言語としての日本語・複文

1 問題の所存

阿部 (2013) では、日本手話・日本語バイリンガル教育を実践している私立の特別支援学校 (聴覚障害) 小学部第3学年から第6学年の児童14名の絵本「Frog, where are you?」(Mayer, 1964) を題材とした第二言語となる日本語の作文について横断的に調査している。その結果、第6学年になると、一定の長さのまとまった文章全体を構成できるようになり、さらに、複文が第6学年になると文全体の6割を占めるようになるとしている。すなわち、日本手話・日本語バイリンガル教育の学校に在籍する児童は文の構造を複文とすることで一定の長さのまとまった文章によって意味内容を伝えることができるようになってきていることを示しているといえる。また、第二言語の書き言葉としての日本語について Fig.1 に示すような習得過程があると提案している。

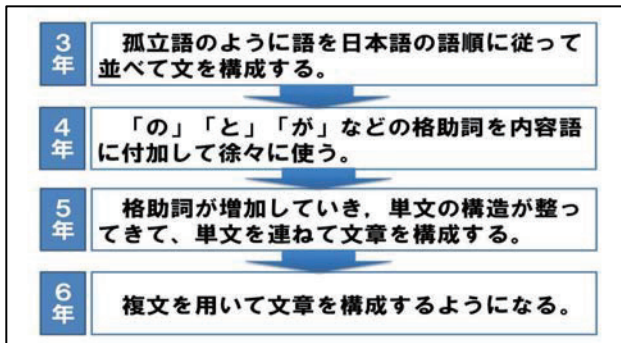


Fig.1 第二言語としての日本語の習得

そこで、本研究では、小学部第4学年と、その3年後の中学部第1学年において、同様の方法を用いて日本語作文を収集し、複文の数と構成について、縦断的に調査する。

2 方法

阿部 (2013) と同様に絵本「Frog, where are you?」を用いた。対象児は、阿部 (2013) の調査時点で小学部第4学年であった女子児童4名である。聴覚障害以外に障害はない。また、同校に幼稚部から在籍している。本研究での調査時点では、4名ともに同校中学部第1学年であった。対象生徒の両親は全員聴者である。

同絵本の全24場面から物語のあらすじを理解するのに問題が生じない程度に15場面を抜き出し、見開きの左ページに絵本から抜き出した場面を2~4場面ずつ配置し、右ページには縦書きで文章を記入できる罫線を入れた文章記入欄を配置した冊子を作成し、児童生徒に提示した。

3 結果

(1) 文の産出量と複文の割合

文は句点によって区切り1文とした。小学部第4学年と中学部第1学年における児童別の文の産出量を Fig.2 に、全体の複文の割合を Fig.3 に示す。

(2) 複文の構造

複文は複数の節で構成される。複文の構造が縦断的にどのように変化しているのかを調査するために、節の接続とその接続の形式を分類した。小学部第4学年と中学部第1学年における結果を、Table1 に示す。

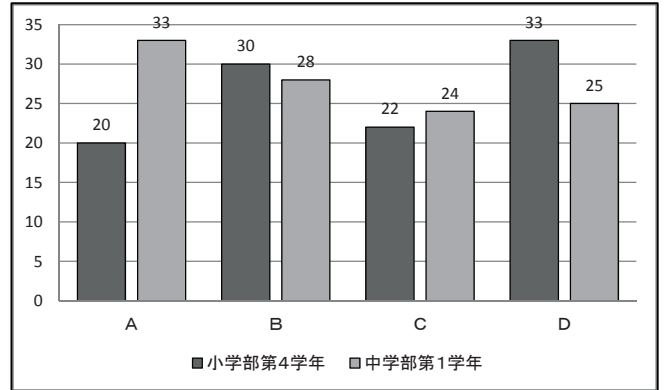


Fig.1 児童生徒別の文産出量

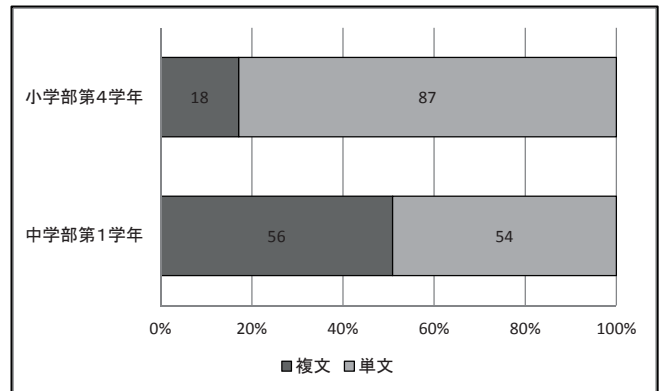


Fig.2 学年別の複文の産出量と割合

Table1 複文の接続の形式

小学部第4学年		中学部第1学年	
Vテ	10	Vテ	38
～時	4	Vタラ	10
その他	6	Vガ	7
		Vト	5
		連体修飾節	5
		Vノデ	3
		その他	17
計	20	計	85

4 考察

Fig.2 に示したように、個別の文の産出量は学年間で比較すると、ほとんど変化がないといえる ($\chi^2(3) = 4.33$ n.s.). しかし、複文の産出量における割合は中学部第1学年で飛躍的に伸びているといえる ($\chi^2(1) = 27.13$ $p < .000$). また、その複文の接続の形式の数も大きく伸びており、さらに形式の種類も増加を見せている。小学部第3学年では、テ形により順序・並列の接続がほとんどであるが、中学部第1学年になると、テ形も依然として多いが、条件・仮定を示すタラや、逆接のガ、原因・理由を示すノデといった接続助詞、名詞を詳しく説明する修飾節など多様な接続の形式を用いて複文を構成できるようになっている。つまり、同じ量の情報を示すために、短い単文を並べて作文をする段階から、複雑な接続形式を用いて複文により作文を構成できるようになっていることが分かった。

(ABE Takanobu)